

公共事業の亡霊、再び

—町課長とコンサルの「親密」な関係—

かしの逆風の中、ひそかにダム建設による地域おこしを画策する動きがあるらしい。かつて首都圏からのスキー客でにぎわったY県O村。いまや村唯一のスキー場も運営企業が経営破綻、深刻な過

まだこんなことをやっているのか……。待ったなしの財政再建と公共事業抑制の流れ、さらには自然環境保護意識の高まりや脱ダムの動きなど、近年ダムをめぐむ状況は厳しい。し

疎化、高齢化が悩みのタネ。隣接自治体との合併による合理化も、地元有力者同士の内輪の勢力争いで実現せず、このままでは早晚村が消滅するのではとも。その対策として持ち出されたのが、かつていったんは凍結となつたダム開発。もともとこのダム、首都圏の水需要が頭打ちとなつたことを受けて建設が凍結されたもの。それを「治水」と「地域振興」を旗印に復活へと持ち込んだのは、地元土建業者と、自称「地域再生プランナー」のコンサルタントH氏。このH氏、実はかつてリゾート開発華やかなりしバブルの頃、某大手広告代理店でリゾート開発の企画を手掛け、方々の自治体のリゾート開発をプロデュースしていた人物。それらの地域が今どうなっているかは周知の通り。いわば、知る人ぞ知る「札

付き」なのだ。このH氏が今取り入っているのが、O村の「影のドン」とも呼ばれるK課長。ヤリ手として評判が高く、県幹部や国交省にも顔が利くなど幅広い交友関係があるため、村内での信頼も厚い。しかしK課長とH氏は、打ち合わせと称して毎晩飲み歩くほか、県庁や東京への出張の際にも必ず同行し、各地の飲み屋街を荒らしまわっているらしい。「親密」な交際ぶりは村内でも評判になっており、「何かあるのでは」との噂も。「里山が日本を救う 持続可



疑惑の県K課長（上）と自称コンサルタントH氏（下）。村ではよく毎日連れだって飲み歩くなど異様な「親密」ぶりで、「何かあるのでは」との噂も。

能な地域開発」などの著書で知られる、環境経営に詳しい駒東大学大学院教授の山口浩氏は「村には豊かな自然や落ち武者伝説など、歴史的観光資源が数多くある。未活用その資源を活用し住民自身の手で地域おこしを進めるべきなのに、土建政治や行政の私物化で自然が破壊されてしまうのは情けない」と憤りを隠さない。この時代にこんな時代錯誤が許されているのか。民主党政権の前近代的体質が問われる。